

2022年度

かくた版アクティブ・チャイルド・プログラム
調査報告書

I.事業の概要	3
II.調査の概要	4
III.調査結果のサマリ	6
IV.主な調査結果(経年)	7
(1)運動・スポーツの好き嫌い	8
(2)運動あそび出前講座参加前後の運動回数・時間の変化	10
(3)運動あそび出前講座参加後の運動意向や気持ちの変化	11
(4)運動・スポーツについて感じていること	12
(5)家族との運動・スポーツ(保護者回答)	15
(6)運動あそび出前講座参加後の家庭での子どもの変化(保護者回答)	17
(7)運動あそび出前講座参加後の子どもと一緒に遊ぶ際の保護者の気持ちや内容の変化(保護者回答)	18
(8)講座参加後の保護者自身の運動に対する行動や意識の変化(保護者回答)	19
(9)子どもが運動・スポーツをすることへの期待(保護者回答)	20
V.主な調査結果(2022年度調査新規項目)	21
(1)参加した子どもを身体が動かせる施設や場所へ連れていくようにしているか	22
(2)講座参加後に子どもが保護者を運動に誘うようになったか	23
(3)かくだペットボトルモデル(スポーツ)	24
VI.主な調査結果(追跡調査)	25
(1)実施頻度の推移	26
(2)運動スポーツについて感じていることの推移	27
VII.課題解決に向けた取り組みと今後の展開	28

＜かくだ版アクティブ・チャイルド・プログラムの事業内容＞

<p>概 要</p>	<p>宮城県角田市において、幼児期における身体活動・運動面での課題解決、幼児の生涯にわたる健康的で活動的な生活習慣の形成を目的に、発達段階に応じた適切な身体活動・運動(からだを動かすことや遊び)を提供する講習会・出前講座(「かくだ版アクティブ・チャイルド・プログラム」)を実施する。市内の幼稚園、保育所、認定こども園等(以下、「保育現場」)での開催を予定することから、保育現場に通う幼児(未就学児)が対象となる。保育現場では保育者向けの研修会と出前講座を、乳幼児健診とスポーツ交流館では、乳幼児親子への教室を展開し、身体活動・運動の定着化を図る。</p>
<p>実施主体</p>	<p>角田市教育委員会、スポーツネットワークかくだ、笹川スポーツ財団</p>
<p>ターゲット</p>	<p>角田市内の未就学児(0～5歳児)</p>
<p>事業内容</p>	<p>事業①幼稚園、保育所、認定こども園等の場を活用した事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市内保育現場の教諭・保育士を対象に運動あそびについての研修会を開催 ・保育現場で実践できる「かくだ版アクティブ・チャイルド・プログラム」運動あそび出前講座(4・5歳児クラス対象)の実施 <p>対象:市内の保育所・幼稚園等4園 計270人</p> <p>日程:①2022年5～6月 各園で1回実施(実施種目:運動会に向けたリレーあそび)</p> <p>②2022年11月～2023年2月 各園で2回実施(実施種目:しっぽとり、メチャビー、サーキットあそびなど)</p> <p>事業②乳幼児健診の場を活用した事業</p> <p>乳幼児健診の待ち時間を活用した運動あそび講座を実施し、市内の乳幼児親子へ発達段階に応じた適切な運動の情報発信をするとともに、運動体験の場を提供</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「3～5か月児健診」「1歳おたんじょう相談」「2歳6か月児歯科検診」での「運動あそび講座」実施 <p>事業③子育て支援センター・スポーツ交流館での運動あそび講座開催</p> <p>希望者が自由に参加できる「アクティブ・チャイルド・プログラム」運動あそび教室の定期開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日程:すべてのコースが2022年6月～2023年3月まで月1回実施 ・平日コース ・休日コース <p>対象:0、1歳児「赤ちゃんママのヨガ&ストレッチ」</p> <p>2、3歳児「ちびっこママのリフレッシュ体操」</p> <p>対象:1、2歳児「ウィークエンド ママ・ベビー運動あそび」</p> <p>3歳～未就学児「ウィークエンド ママ・キッズ運動あそび」</p>

1. 目的:

角田市の幼児期の運動・スポーツに対する以下4つの課題解決に向けて「かくだ版アクティブ・チャイルド・プログラム」に取り組み、阻害要因や促進要因の仮説検証とともに、実施頻度や実施意欲の改善を目的とした

- ①昔と比べ運動をしない子、苦手な子が多く小学校以前の幼児期に二極化がみられる
- ②運動が苦手な子には丁寧な指導が必要で時間をかけて楽しみのある内容が求められる
- ③スポーツに親しむ家庭環境の醸成や、保護者が過度に怪我を恐れる風潮の改善が求められる
- ④日常の遊びで身体を動かす機会が減少している

2. 調査期間:2022年12月～2023年2月

3. 調査対象:宮城県角田市の保育所・幼稚園に通う4～6歳の園児とその保護者

4. 標本数:270組(540人) 有効回収数(率):210組(77.8%)

5. 調査方法:質問紙調査

調査票の配布は「運動あそび出前講座」に参加した保育所・幼稚園の園児・保護者に直接配布し、回答後保育所等にて回収を行った

6. 担当者:鈴木貴大 笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 政策オフィサー

吉田智彦 //

宮本幸子 //

武長理栄 //

2022年度調査回答者の属性(園児・保護者)

年齢

	度数	%
4歳	18	8.6
5歳	88	41.9
6歳	92	43.8
無回答	12	5.7
合計	210	100

性別

	度数	%
男	91	43.3
女	104	49.5
答えたくない	1	0.5
無回答	14	6.7
合計	210	100

所属クラス

	度数	%
年中(4歳児クラス)	91	43.3
年長(5歳児クラス)	104	49.5
無回答	15	7.1
合計	210	100

子どもとの続柄(保護者回答)

	度数	%
父	10	4.8
母	196	93.3
無回答	4	1.9
合計	210	100

21⇒22年追跡調査回答者※

性別	度数	%
男	44	51.8
女	39	45.9
答えたくない	1	1.2
無回答	1	1.2
合計	85	100

※2021年度調査、2022年度調査を2年連続で回答した人

出前講座実施は子どもの気持ちや動きの改善、保護者への声かけにつながった

3回目の実施となる2022年度調査では、前年度と同程度の回収率(77.8%)を得ることができ、角田市内の幼児(4、5歳児クラス)の運動・スポーツ習慣や意識、生活習慣、保護者の意識など、より実態に近いデータの収集ができた。3回の調査を通して本事業が子どもや保護者の運動・スポーツに対する気持ちや意識の改善に効果をもたらした一方、日常的に運動あそびを継続するような行動変容に至ったかという評価については引き続き課題が残る。今後は子どもたちの運動あそびの実施状況をより詳細に把握できる調査、分析方法の検討も必要と考えられる。

① 子どもの運動・スポーツ実施と気持ちの変化

運動あそび出前講座受講後の実施意欲や講座への参加希望は3回の調査いずれも高い割合を示し、**本事業が子どもたちの運動・スポーツ実施に対する気持ちに好影響を与えていることが確認された。**(p.8～11)

2021年度調査では出前講座前の実施頻度が低頻度のグループは高頻度のグループよりも運動・スポーツに対してネガティブな感情を抱く傾向であったが、2022年度調査では頻度による差はほとんどみられず、その傾向が改善されつつある。

運動あそび出前講座の継続的な実施により、運動・スポーツに対してネガティブな感情を抱く子どもの実施頻度や実施意欲が向上するなどの効果がみられた。(p.12～14)

② アクティブ・チャイルド・プログラムの効果の確認と子どもの意欲向上と保護者への声かけ

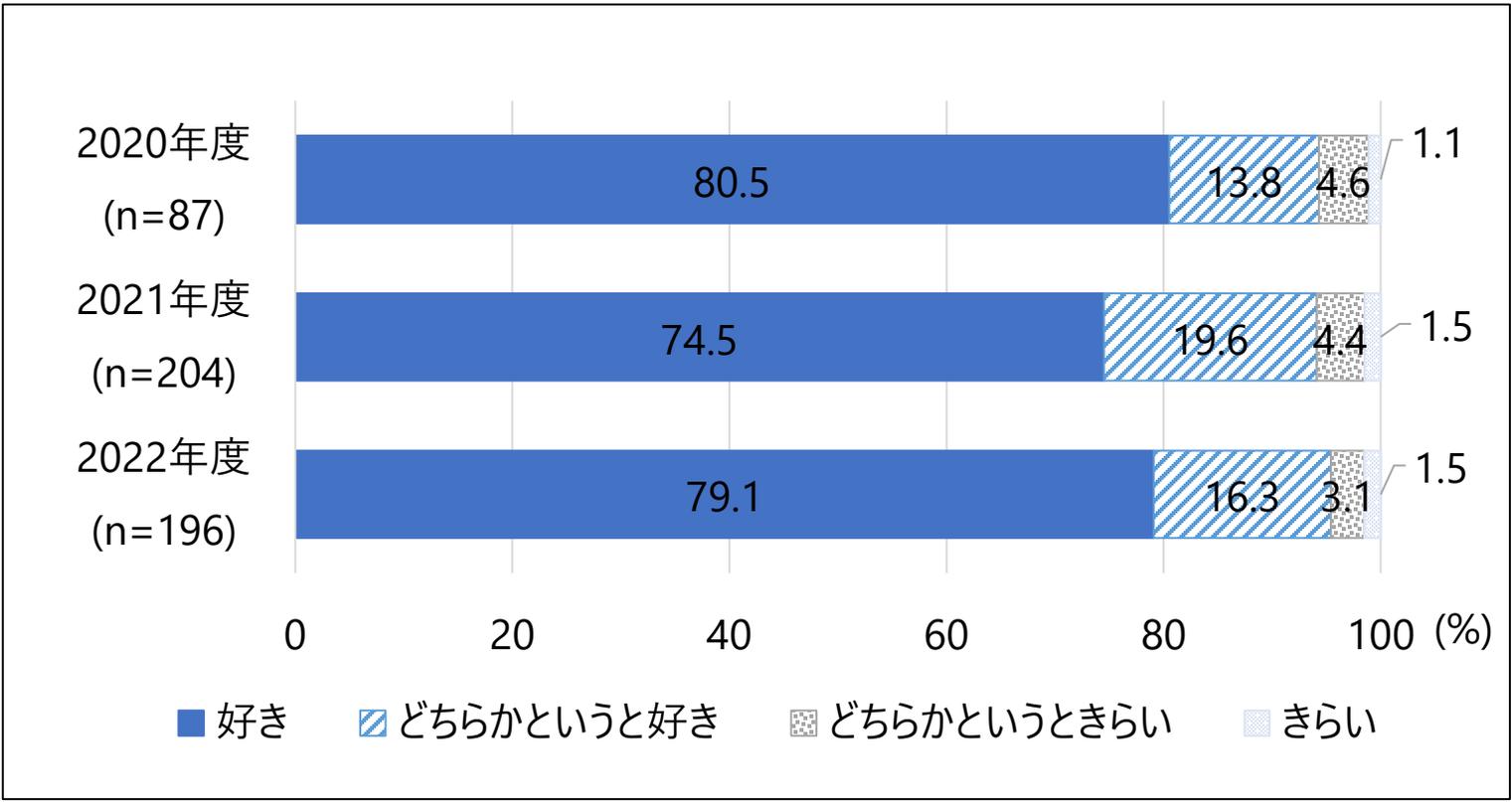
運動あそび出前講座参加後の家庭での子どもの変化において「できる動きが増えた」「運動が上手になった」の割合が2020年度調査から増加の傾向を示した。また、保護者の運動あそびのレパートリーが増えた割合も増加し、**アクティブ・チャイルド・プログラム実施により期待される効果が確認された。**(p.17～20)

かくだ版アクティブ・チャイルド・プログラムの実施には子どもの実施頻度や意欲の改善に加え、子どもが保護者を運動あそびに誘い、保護者自身が運動・スポーツに親しむきっかけづくりも狙いのひとつである。運動あそび出前講座の実施により子供の運動あそびへの意欲が向上し、保護者を誘った割合は全体で51.1%であった。子どもからの誘いが保護者の行動変容に影響を与えたかは明らかにできなかったものの、**運動あそび出前講座の実施は子どもが保護者を運動あそびに誘うきっかけになり、子どもを通して運動・スポーツを実施する機会の提供につながったと考えられる。**(p.22～27)

V. 主な調査結果（経年）

(1) 運動・スポーツの好き嫌い

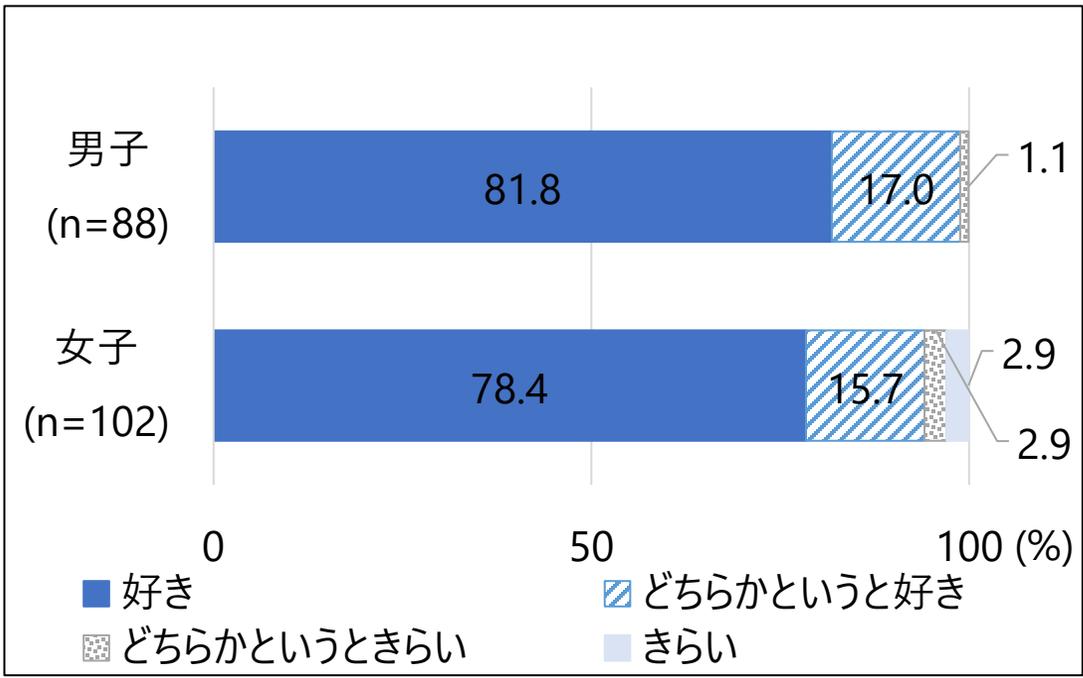
図表1 運動・スポーツの好き嫌い



2022年度の結果は「好き」79.1%、「どちらかという好き」16.3%、「どちらかという嫌い」3.1%、「嫌い」1.5%であった。「好き」と「どちらかという好き」を合わせた割合は2021年度94.1%、2022年度95.4%とほとんどの子どもは運動・スポーツが好きと回答した。

(1) 運動・スポーツの好き嫌い

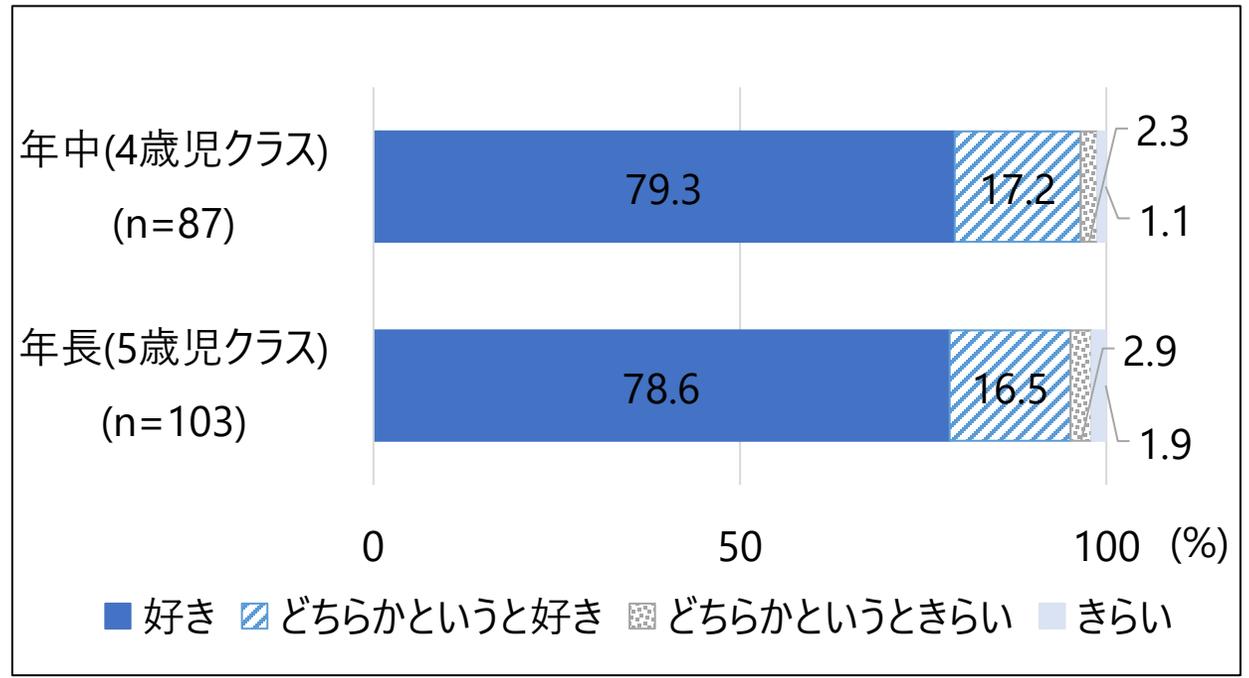
図表2 運動・スポーツの好き嫌い(性別)



「好き」の割合は男子81.8%、女子78.4%であり、男女差はほとんどみられなかった。

「好き」「どちらかという好き」の割合を合わせると男子98.8%、女子90.7%と男女ともに9割以上は運動・スポーツが好きと回答した。

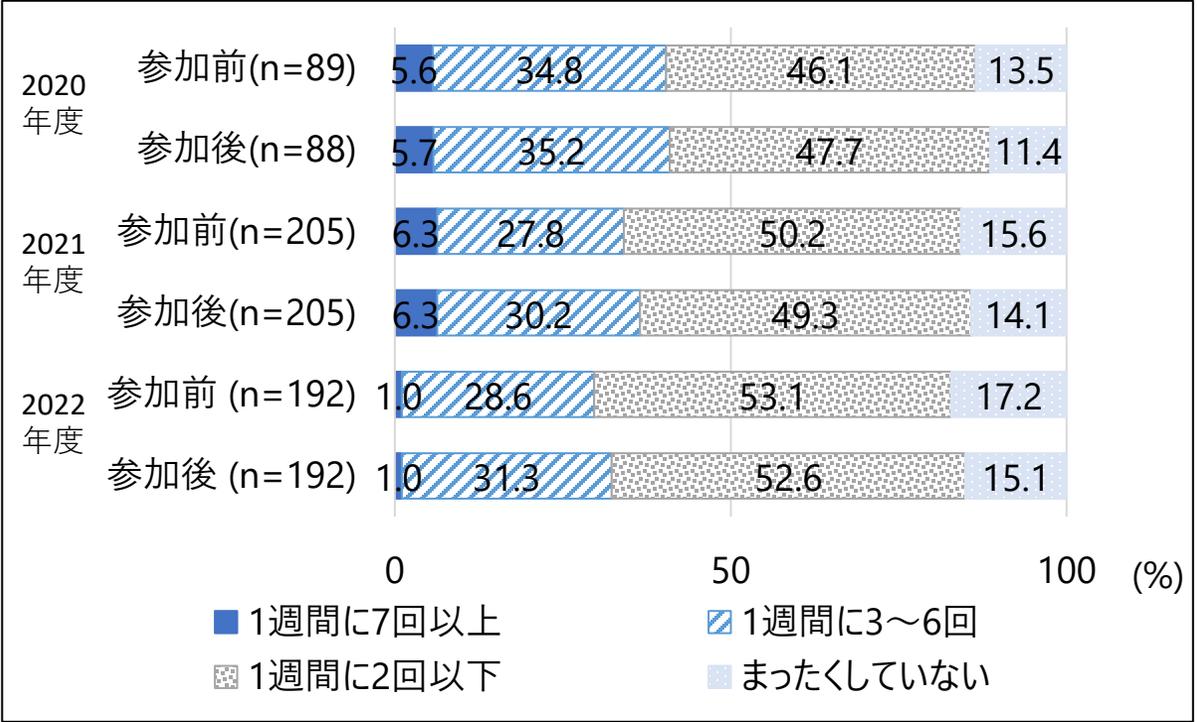
図表3 運動・スポーツの好き嫌い(クラス別)



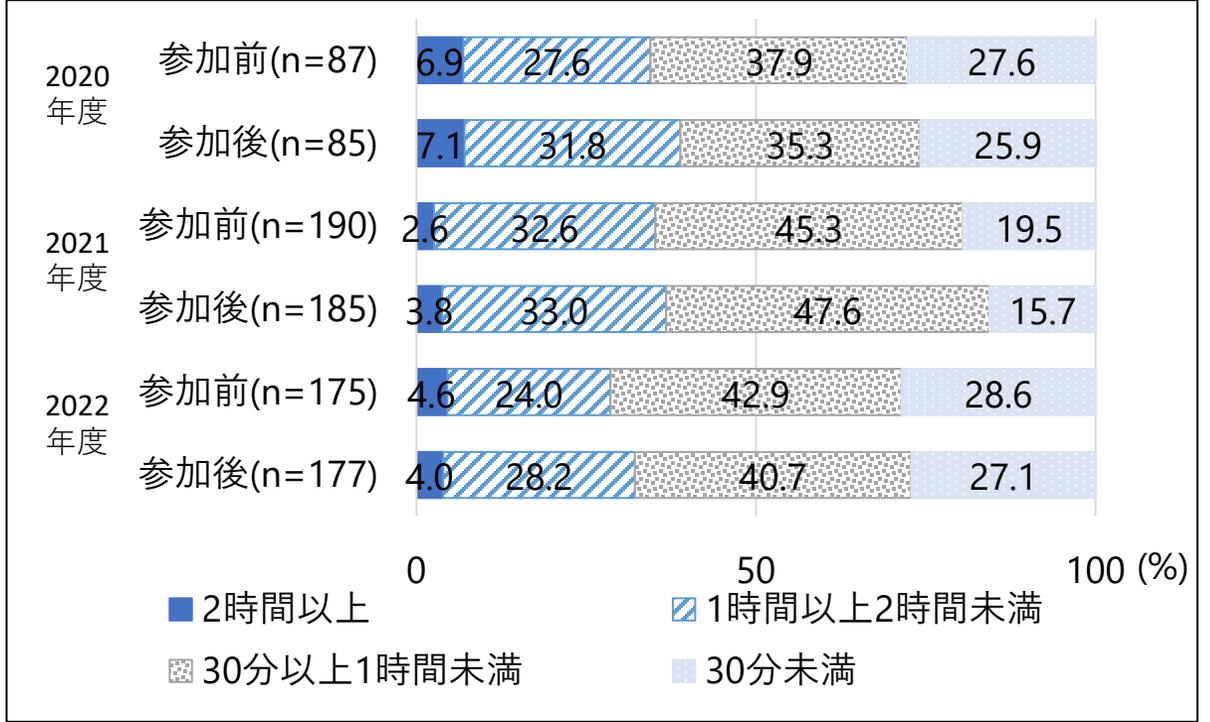
「好き」「どちらかという好き」を合わせた割合は年中(4歳児クラス)96.5%、年長(5歳児クラス)95.1%と両クラス9割を超え、ほとんど差はみられなかった。

(2) 運動あそび出前講座参加前後の運動回数・時間の変化

図表4 講座参加前後の運動回数の変化



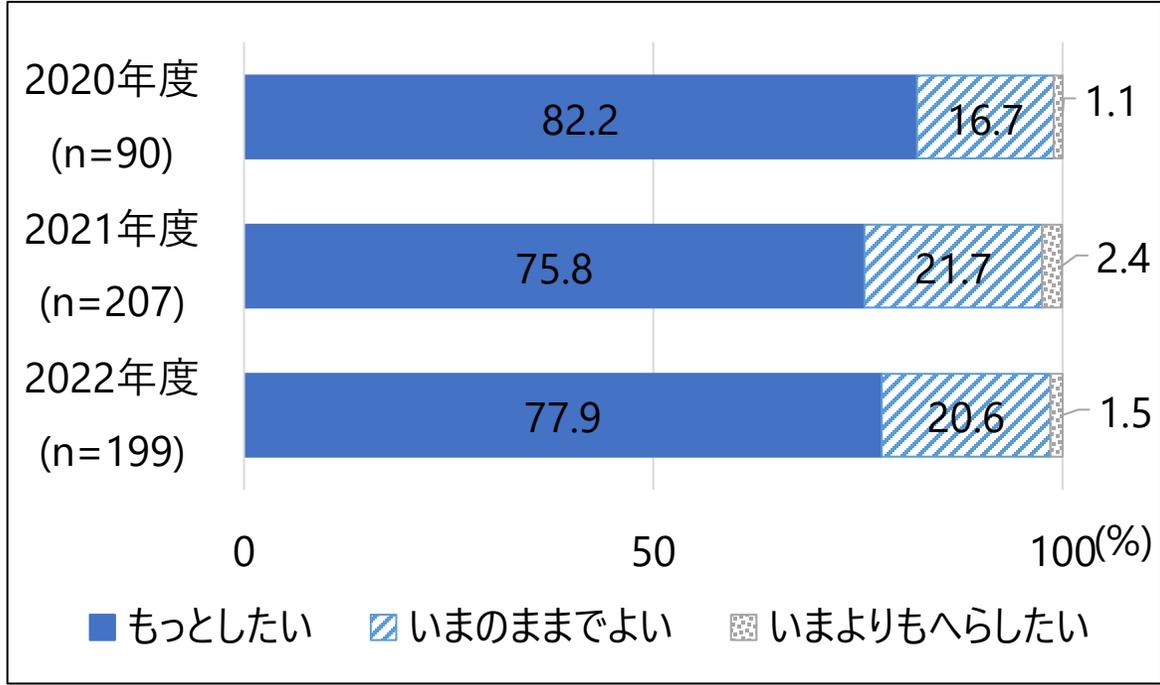
図表5 講座参加前後の運動時間の変化



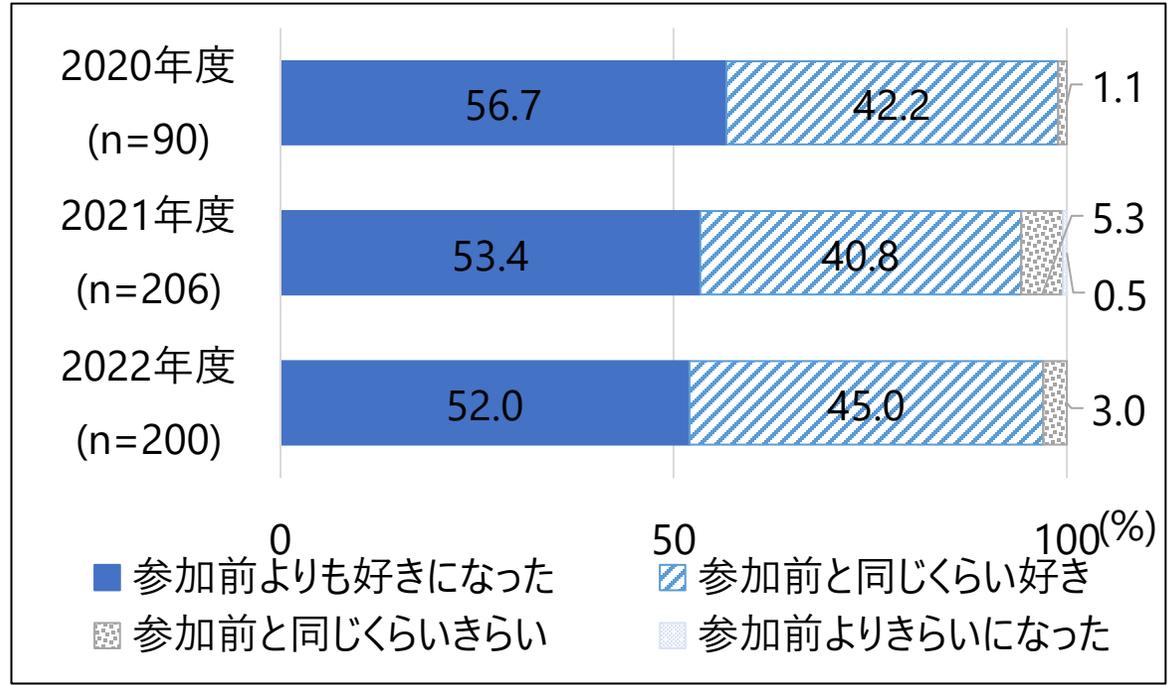
2022年度の運動あそび出前講座参加前後の運動回数・時間の変化をみると、「1週間に7回以上」は参加前後ともに1.0%、「1週間に3~6回」は2.7ポイント増(28.6%→31.3%)と回数の増加はほとんどみられなかった。運動時間が「2時間以上」は0.6ポイント減(4.6%→4.0%)とほとんど変化はなかったものの、「1時間以上2時間未満」は4.2ポイント増(24.0%→28.2%)、1時間未満(「30分以上1時間未満」「30分未満」の合計)は3.7ポイント減(71.5%→67.8%)と実施時間は全体的に微増している。

(3) 運動あそび出前講座参加後の運動意向や気持ちの変化

図表6 参加後の運動意向



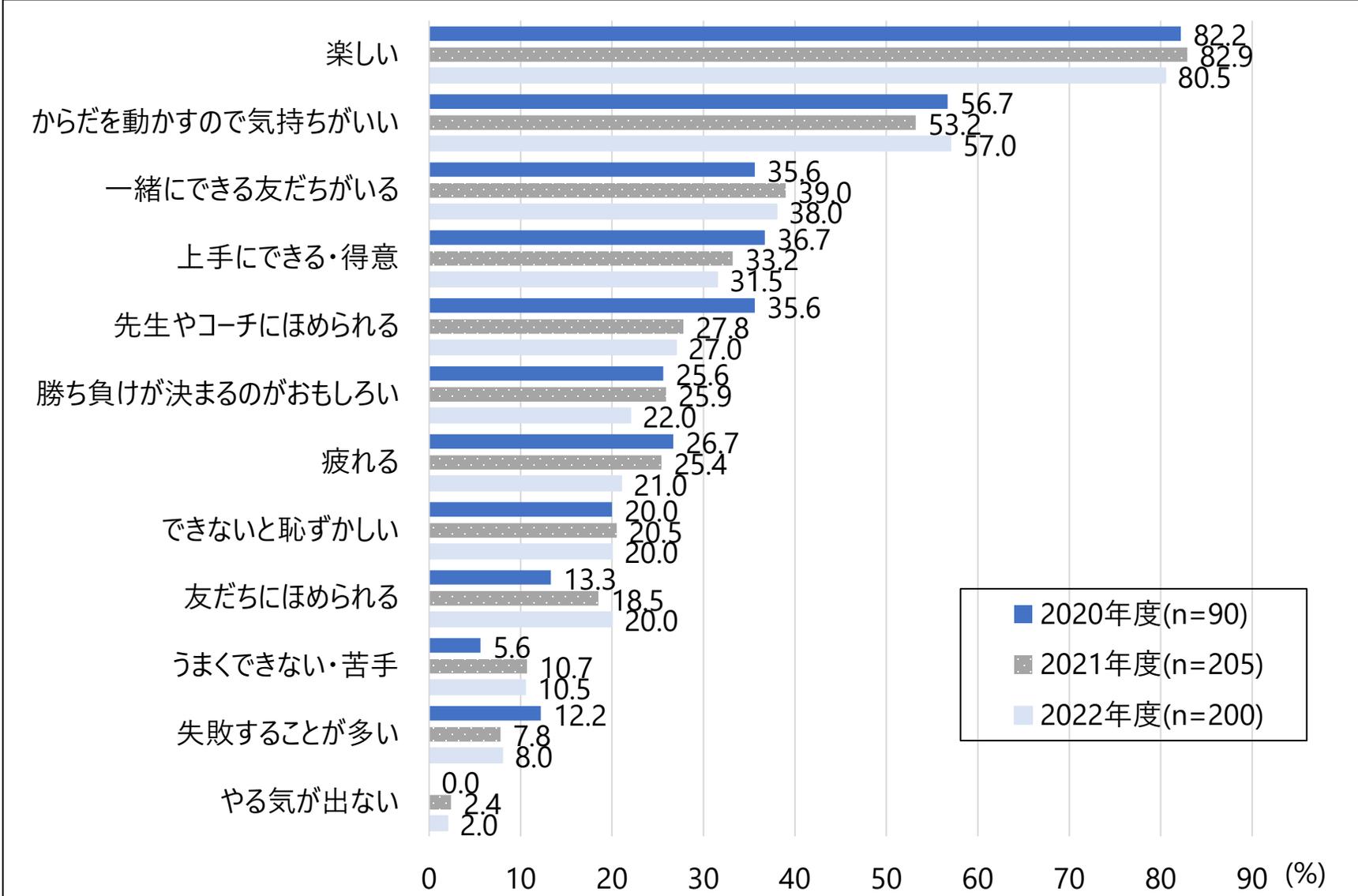
図表7 参加後の運動に対する気持ちの変化



講座参加後に運動・スポーツを「もっとしたい」と回答した割合は2020年度は82.2%、2021年度は75.8%、2022年度は77.9%と引き続き高い値を示した。また、気持ちの変化においても「参加前よりも好きになった」は2020年度56.7%、2021年度53.4%、2022年度52.0%と3回の調査すべてで50%以上を示し、「参加前と同じくらい好き」と合わせた割合はいずれも9割を超える。

(4) 運動・スポーツについて感じていること

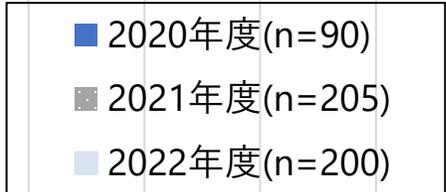
図表8 運動・スポーツについて感じていること



2022年度では「楽しい」が80.5%と最も高く、「からだを動かすので気持ちがいい」が57.0%で続いた。これまですべての調査で「楽しい」は80%を超え、「からだを動かすので気持ちがいい」は50%を超えた。

一方「うまくできない・苦手」と感じている園児は2020年度5.6%に対し2021年度は10.7%。2022年度は10.5%であった。

3回の調査を通して、子どもたちの運動・スポーツに対する感情が確認でき、「楽しい」をはじめポジティブに捉える傾向が示された。



(4) 運動・スポーツについて感じていること

図表9 ポジティブ、ネガティブな感情と実施頻度の関係

		2021年度			2022年度		
		A:高頻度 (n=102)	B:低頻度 (n=83)	ポイント差 (A-B)	A:高頻度 (n=80)	B:低頻度 (n=91)	ポイント差 (A-B)
ポジ テイ ブ	楽しい	85.3	83.1	2.2	82.5	81.3	1.2
	からだを動かすので気持ちがいい	58.8	45.8	13.0	57.5	59.3	-1.8
	一緒にできる友だちがいる	43.1	37.3	5.8	43.8	39.6	4.2
	上手にできる・得意	38.2	26.5	11.7	37.5	27.5	10.0
	先生やコーチにほめられる	31.4	26.5	4.9	32.5	26.4	6.1
	勝ち負けが決まるのがおもしろい	24.5	26.5	-2.0	22.5	24.2	-1.7
	友だちにほめられる	19.6	16.9	2.7	28.8	15.4	13.4
ネガ テイ ブ	できないと恥ずかしい	25.5	16.9	8.6	18.8	20.9	-2.1
	疲れる	19.6	36.1	-16.5	20.0	23.1	-3.1
	うまくできない・苦手	6.9	15.7	-8.8	10.0	13.2	-3.2
	失敗することが多い	6.9	10.8	-3.9	8.8	6.6	2.2
	やる気が出ない	2.0	2.4	-0.4	0.0	3.3	-3.3

運動・スポーツについて感じていることをポジティブ、ネガティブ項目に分類し高頻度、低頻度グループで比較した。

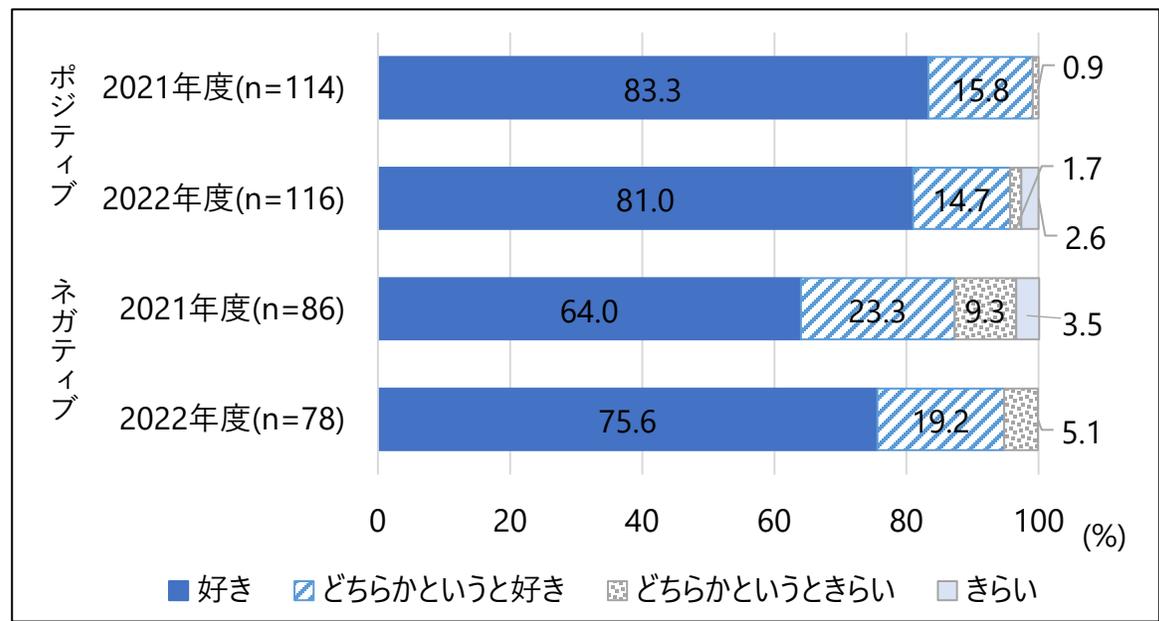
頻度別の差を見ると「からだを動かすので気持ちがいい」は低頻度の値が45.8%から59.3%に増加したため、頻度別の差が縮まった。

ネガティブ項目では2021年度の「疲れる」の差は-16.5ポイントと大きかったが、2022年度ではいずれの項目でも±2~3ポイント差と前回よりも小さくなった。2021年度調査では低頻度のほうが運動・スポーツに対してネガティブな感情を抱く傾向があったが、2022年度調査ではその傾向が改善され出前講座継続の効果と考えられる。

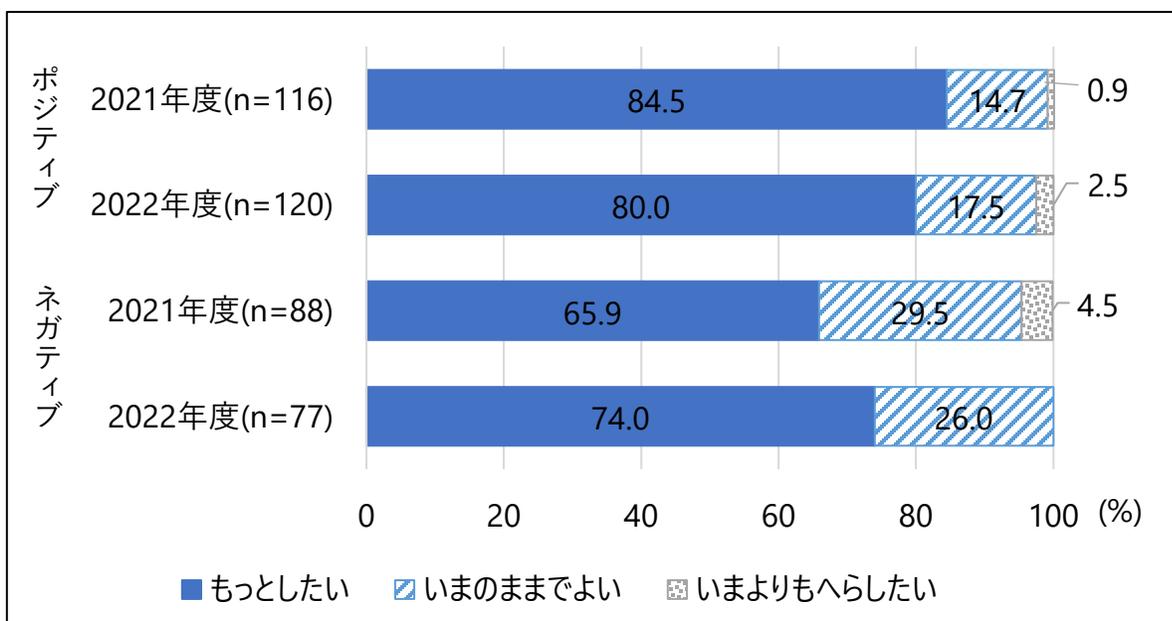
注) 高頻度: 1週間3回以上または1日1時間以上
 低頻度: 1週間に2回以下かつ1日1時間未満
 出前講座実施前の運動・スポーツ実施回数・時間を示す

(4) 運動・スポーツについて感じていること

図表10 ポジティブ、ネガティブな感情と運動・スポーツの好き嫌い



図表11 ポジティブ、ネガティブな感情と講座参加後の気持ち

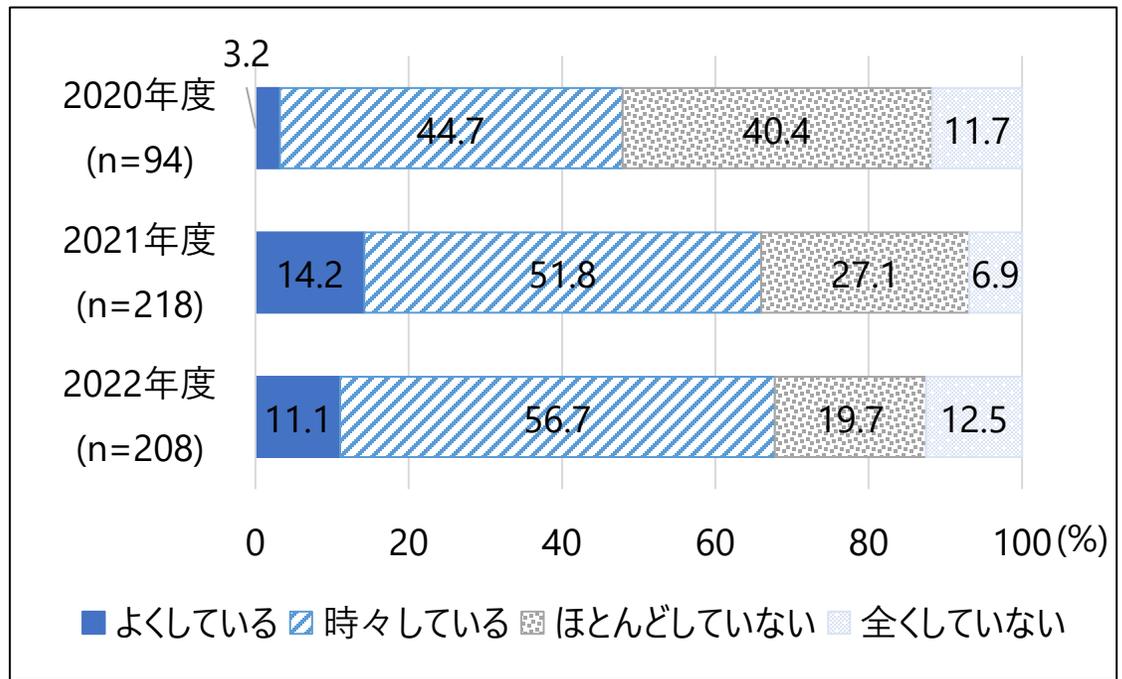


注)「ポジティブ」: 図表9のポジティブ項目のみを選択した園児
 「ネガティブ」: 図表9のネガティブ項目を1つ以上選択した園児

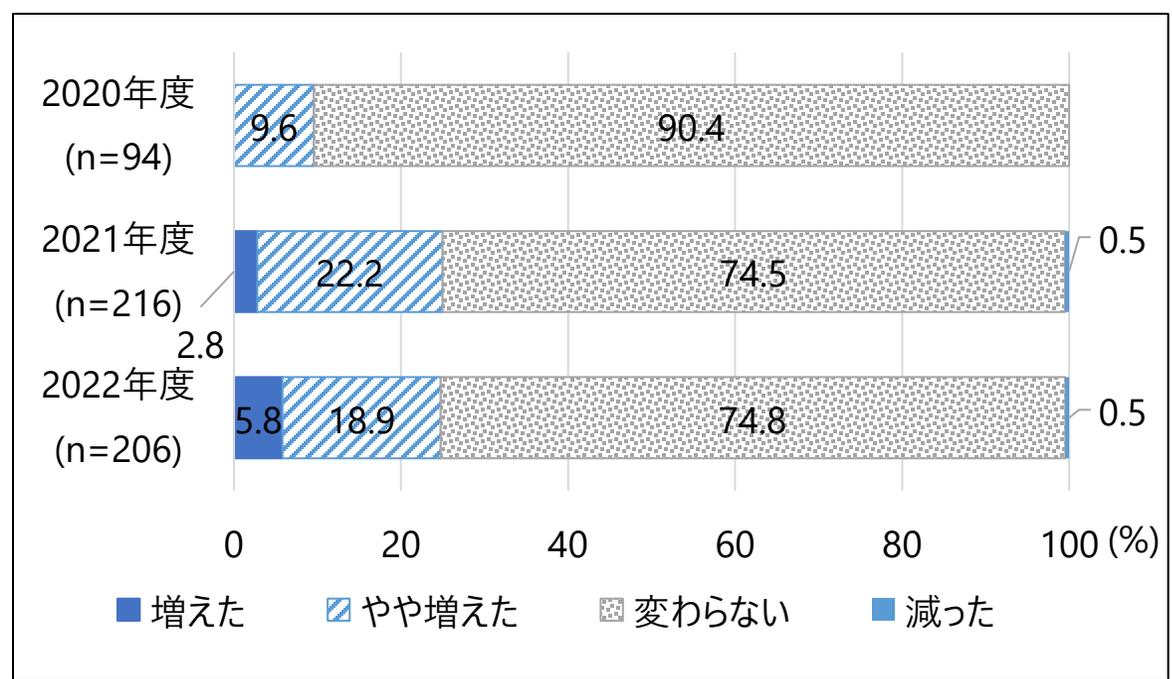
運動・スポーツについてポジティブな子どもとネガティブな子どもにわけて、運動・スポーツに対する気持ちや意欲の推移を示した。図表10、11に示したようにポジティブでは運動・スポーツの好き嫌いの「好き」の割合、講座参加後の気持ちの「もっとしたい」の割合が2021年度、2022年度ともに80%を超え高い値を維持した。一方ネガティブでは、「好き」が11.6ポイント増加(64.0%→75.6%)、「もっとしたい」が8.1ポイント増加(65.9%→74.0%)した。ネガティブな子どもの運動・スポーツに対する気持ちが高まるなど、運動あそび出前講座を継続的に実施した効果があらわれたと考えられる。

(5) 家族との運動・スポーツ(保護者回答)

図表12 家族との運動・スポーツ実施状況



図表13 講座参加後の家族との実施状況の変化

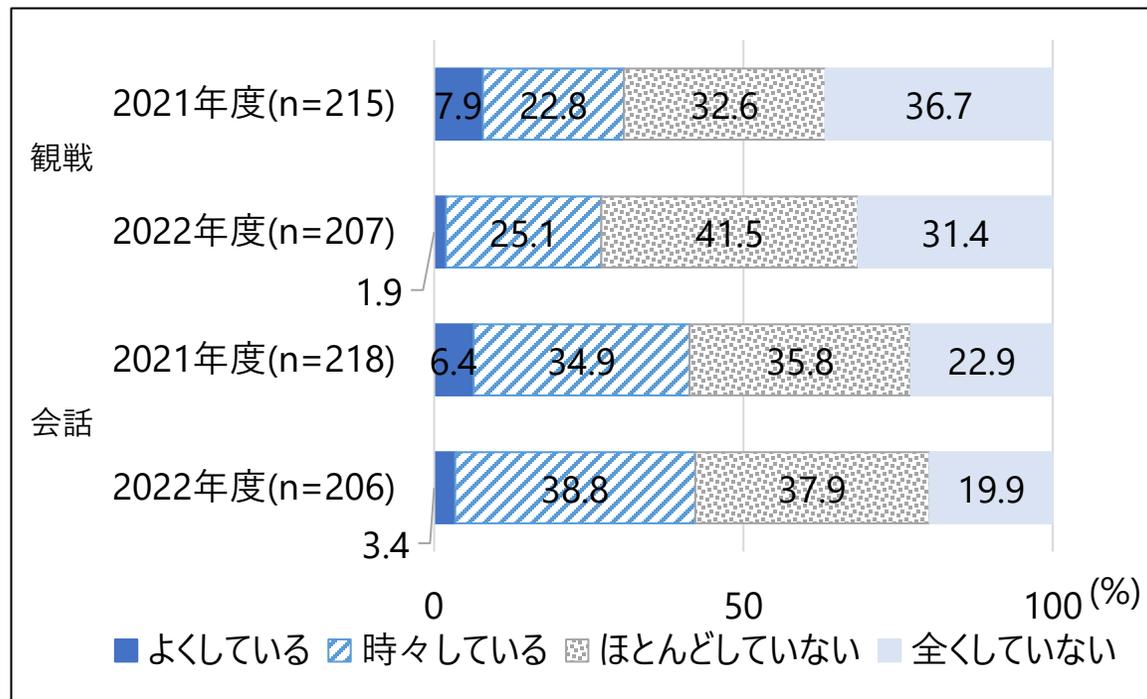


2022年度の家族との運動・スポーツ実施状況は「よくしている」11.1%、「時々している」56.7%、「ほとんどしていない」19.7%、「全くしていない」12.5%であった。「よくしている」「時々している」を合わせると2020年度は47.9%、2021年度は66.0%、2022年度は67.8%と3回の調査で2022年度が最も高い割合を示した。

講座参加後の家族との運動機会が「増えた」の割合は2021年度2.8%に対し、2022年度は5.8%であった。「増えた」と「やや増えた」の合計は2021年度からほとんど変化はなかった。

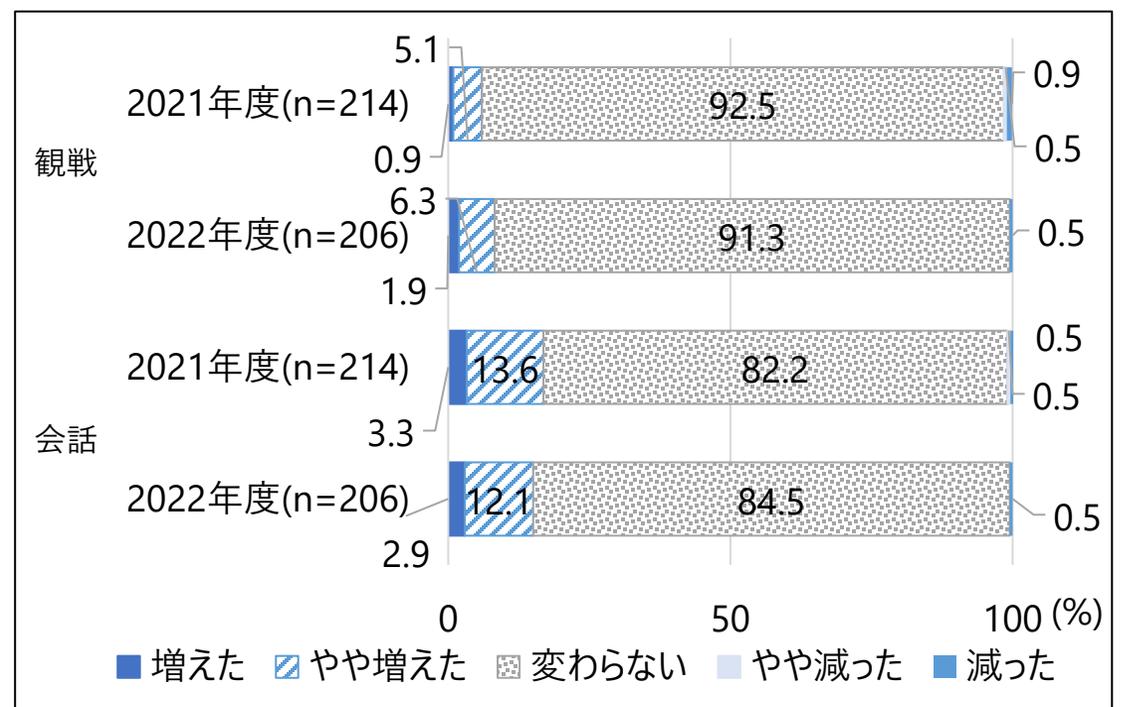
(5) 家族との運動・スポーツ(保護者回答)

図表14 家族との観戦・会話の実施状況



2022年度の家族との観戦は「よくしている」と「時々している」を合わせた割合が27.0%と2021年度の30.7%よりも低い値であった。
 2022年度の家族との会話は「よくしている」3.4%、「時々している」38.8%、「ほとんどしていない」37.9%、「全くしていない」19.9%であった。

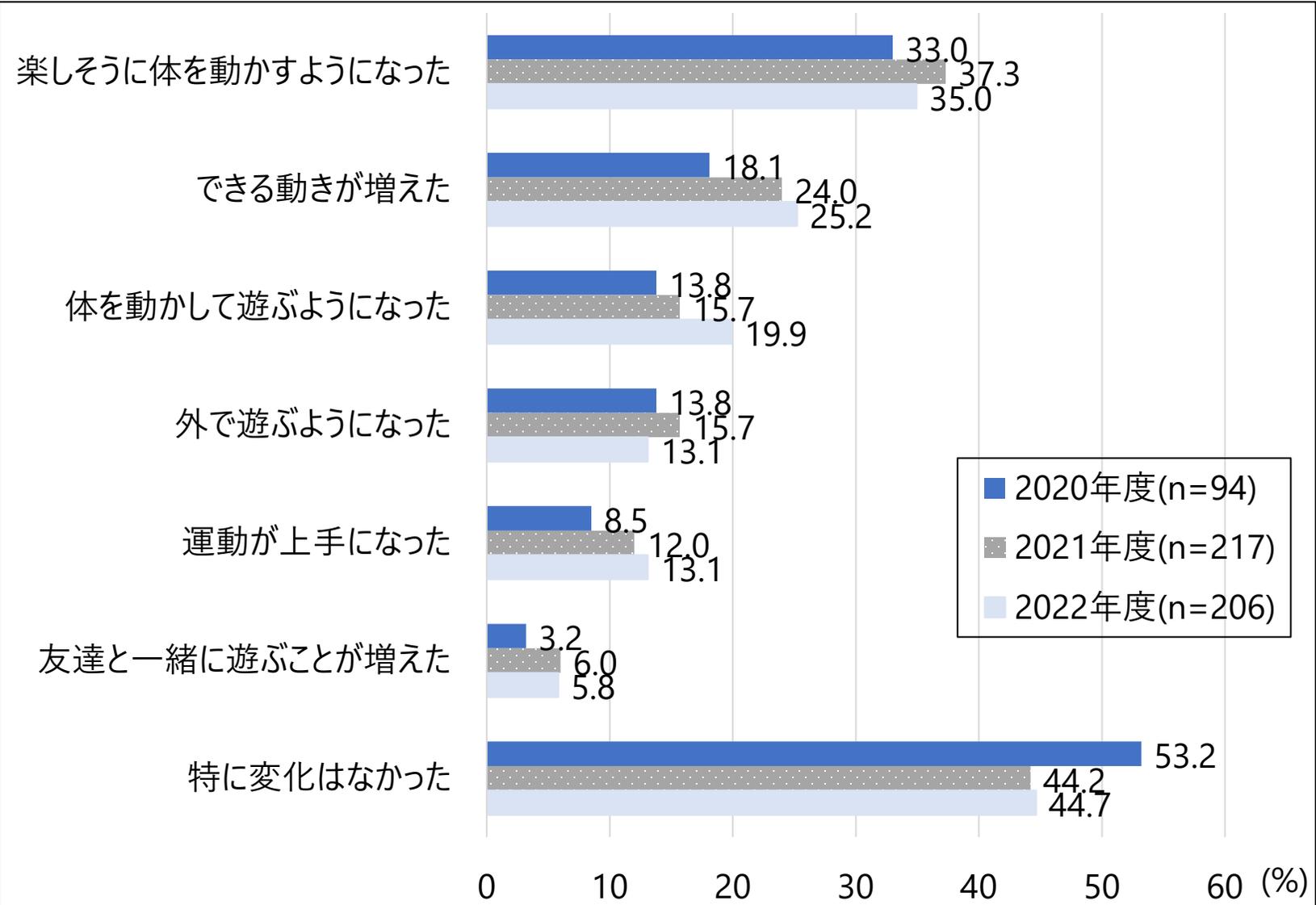
図表15 講座参加後の家族との観戦・会話状況の変化



家族との観戦・会話状況の変化をみると、「増えた」「やや増えた」を足した割合は観戦が2021年度6.0%、2022年度8.2%、会話が2021年度16.9%、2022年度15.0%であった。「変わらない」の割合は観戦、会話ともに経年変化はみられず、出前講座実施による観戦・会話の状況の変化は2021年度と同様の結果となった。

(6) 運動あそび出前講座参加後の家庭での子どもの変化(保護者回答)

図表16 講座参加後の子どもの変化

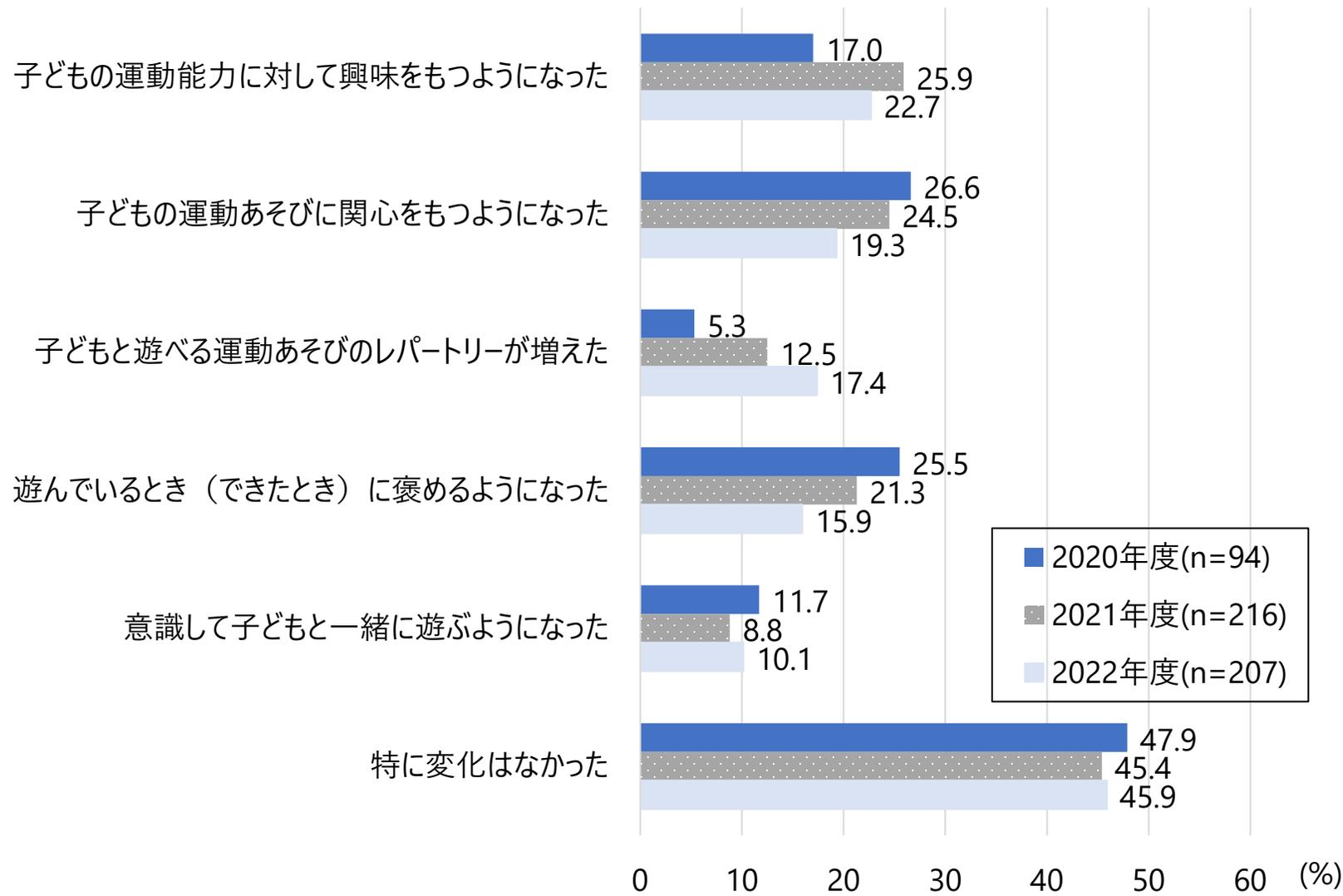


講座参加後の家庭での子どもの様子の変化をみると、「特に変化はなかった」を除き「楽しそうに体を動かすようになった」が3回の調査すべてで最も高く、2020年度33.0%、2021年度37.3%、2022年度35.0%であった。

「できる動きが増えた」は18.1%→24.0%→25.2%、「運動が上手になった」8.5%→12.0%→13.1%と2020年度調査から増加傾向を示した。アクティブ・チャイルド・プログラムの実施により期待される動きの習得や身体の動かし方の上達といった効果が3年間の取り組みにより少しずつあらわれてきたと考えられる。

(7)運動あそび出前講座参加後の子どもと一緒に遊ぶ際の保護者の気持ちや内容の変化(保護者回答)

図表17 保護者の気持ちやあそびの内容の変化

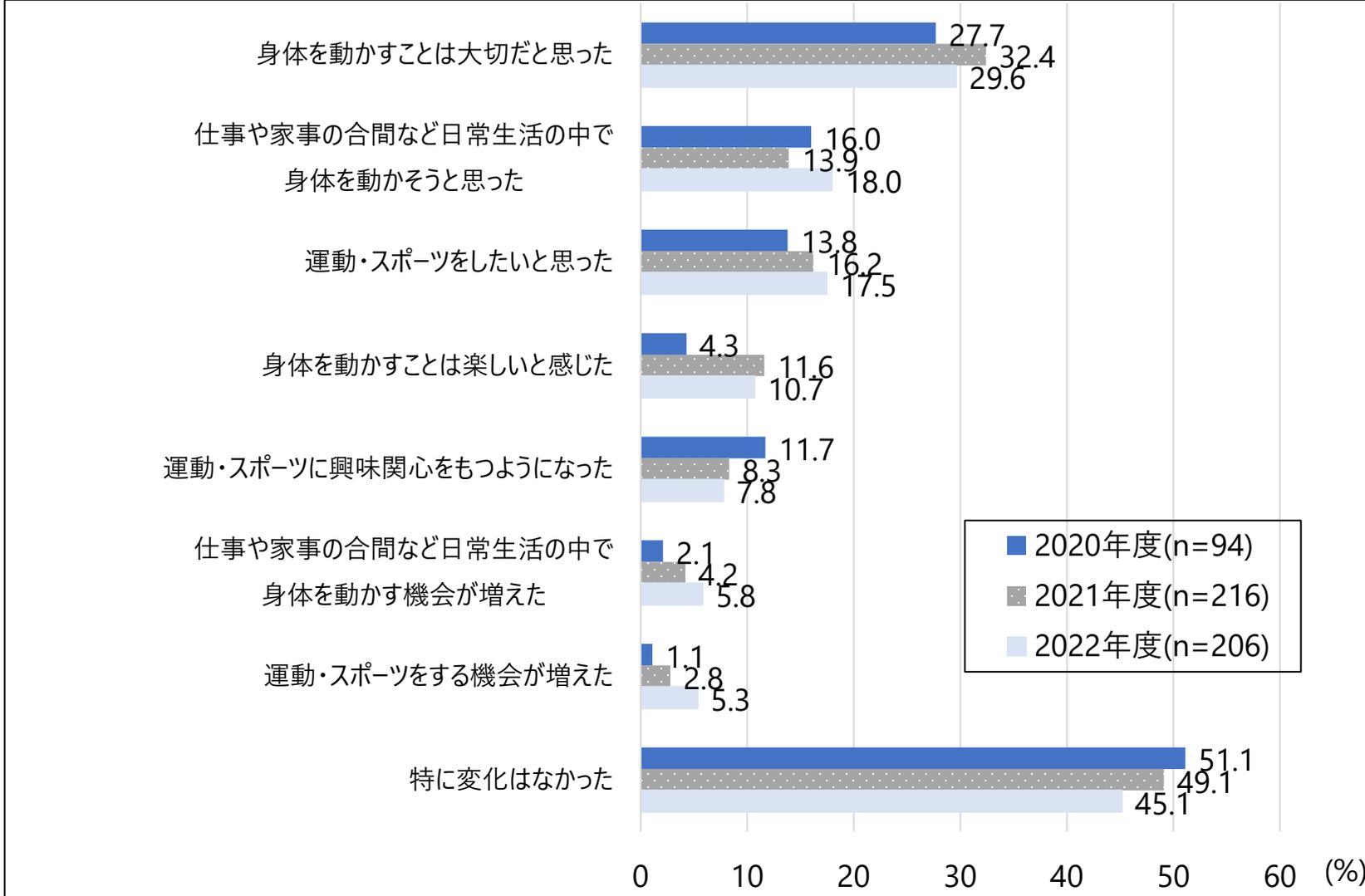


2022年度の調査では「特に変化はなかった」を除き、「子どもの運動能力に対して興味をもつようになった」が22.7%で最も高く、「子どもの運動あそびに関心をもつようになった」19.3%が続いた。

2020年度から「子どもと遊べる運動あそびのレパートリーが増えた」が5.3%→12.5%→17.4%と増加傾向を示した。アクティブ・チャイルド・プログラムの動きの習得や身体の動かし方の上達といった効果が保護者との運動あそびのレパートリー増加にもつながったと考えられる。

(8) 講座参加後の保護者自身の運動に対する行動や意識の変化(保護者回答)

図表18 保護者自身の運動に対する行動や意識の変化

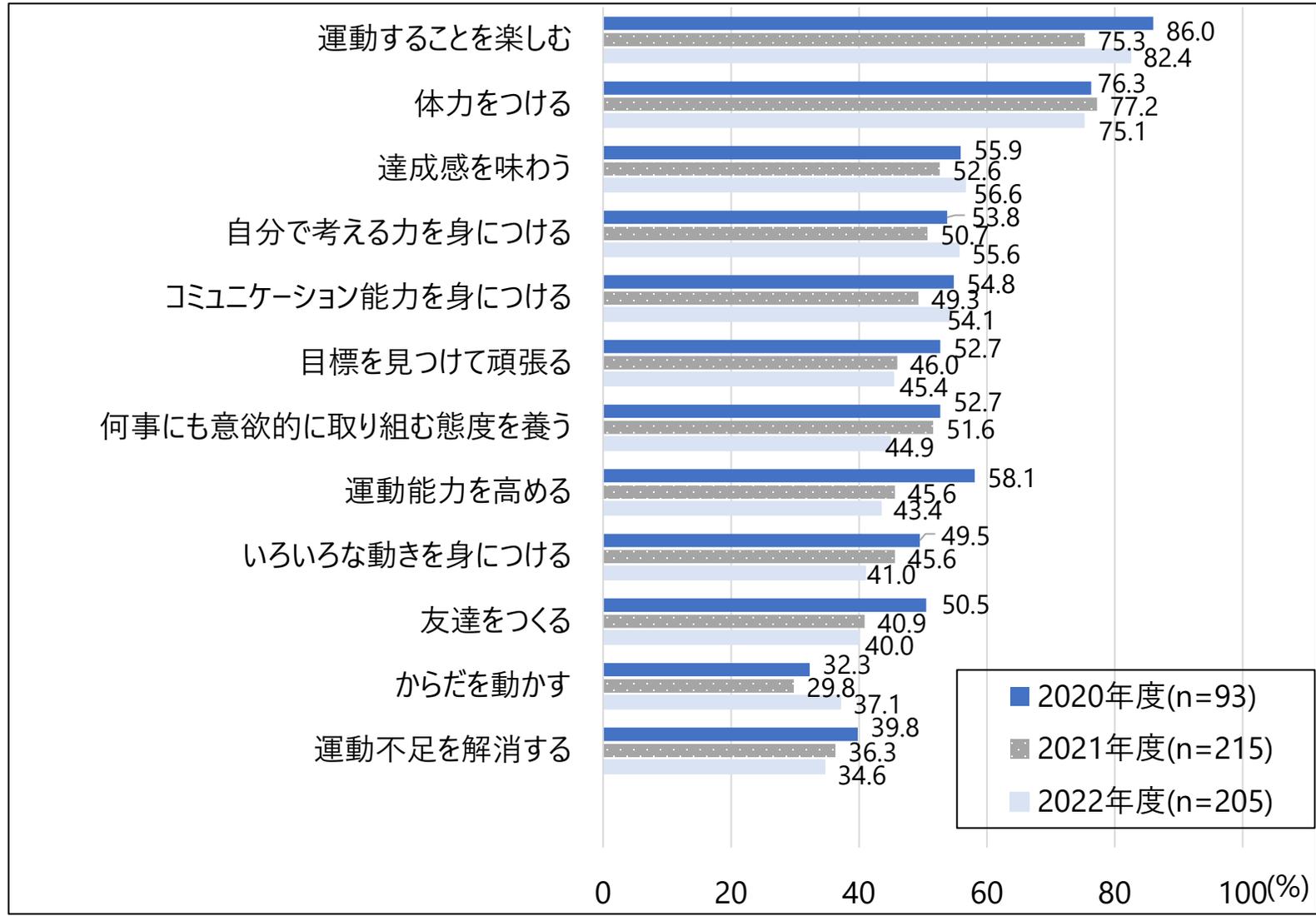


2022年度は「特に変化はなかった」を除き、「身体を動かすことは大切だと思った」29.6%が最も高く、「仕事や家事の合間など日常生活の中で身体を動かそうと思った」18.0%が続いた。

2020年度からの推移をみると、「運動・スポーツをしたいと思った」は13.8% → 16.2% → 17.5%、「日常生活の中で身体を動かす機会が増えた」は2.1% → 4.2% → 5.8%、「運動・スポーツをする機会が増えた」は1.1% → 2.8% → 5.3%と3項目で増加の傾向を示した。

(9) 子どもが運動・スポーツをすることへの期待(保護者回答)

図表19 子どもが運動・スポーツをすることへの期待

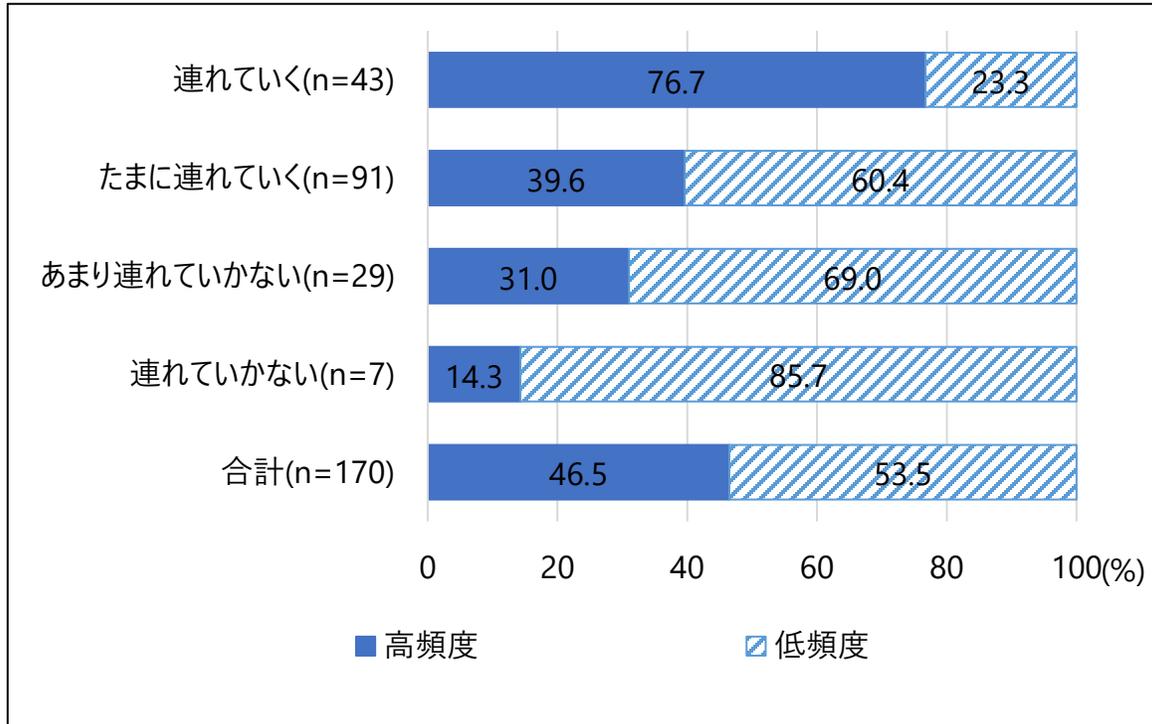


2022年度の調査では「運動することを楽しむ」82.4%が最も高く、「体力をつける」75.1%、「達成感を味わう」56.6%と続く。
 2020年度から3回の調査を行い、いずれの年度においても、子どもが運動・スポーツをすることへの期待は「体力をつける」「運動することを楽しむ」の2つが他と比べて高い割合を示した。そのほか3回の調査すべてで50%を超えた項目は「達成感を味わう」「自分で考える力を身につける」であった。

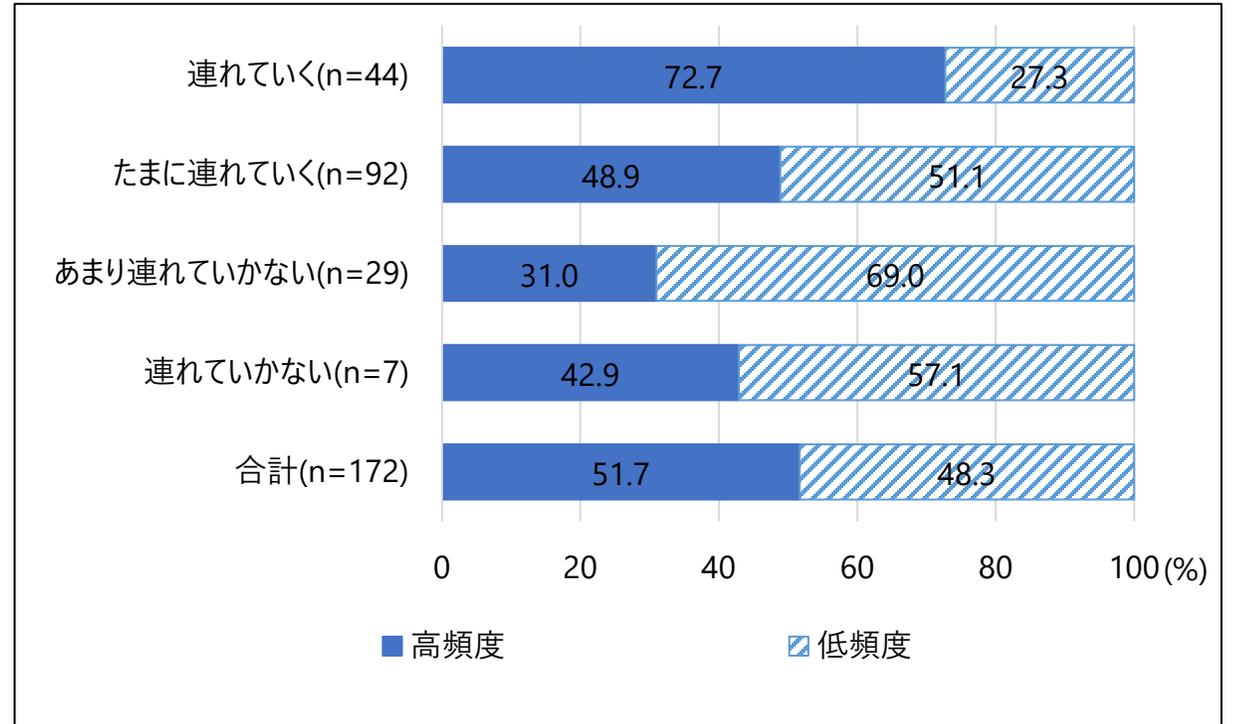
V. 主な調査結果 (2022年度調査新規項目)

(1) 参加した子どもを身体が動かせる施設や場所へ連れていくようにしているか

図表20 講座参加前の実施頻度との関係



図表21 講座参加後の実施頻度との関係

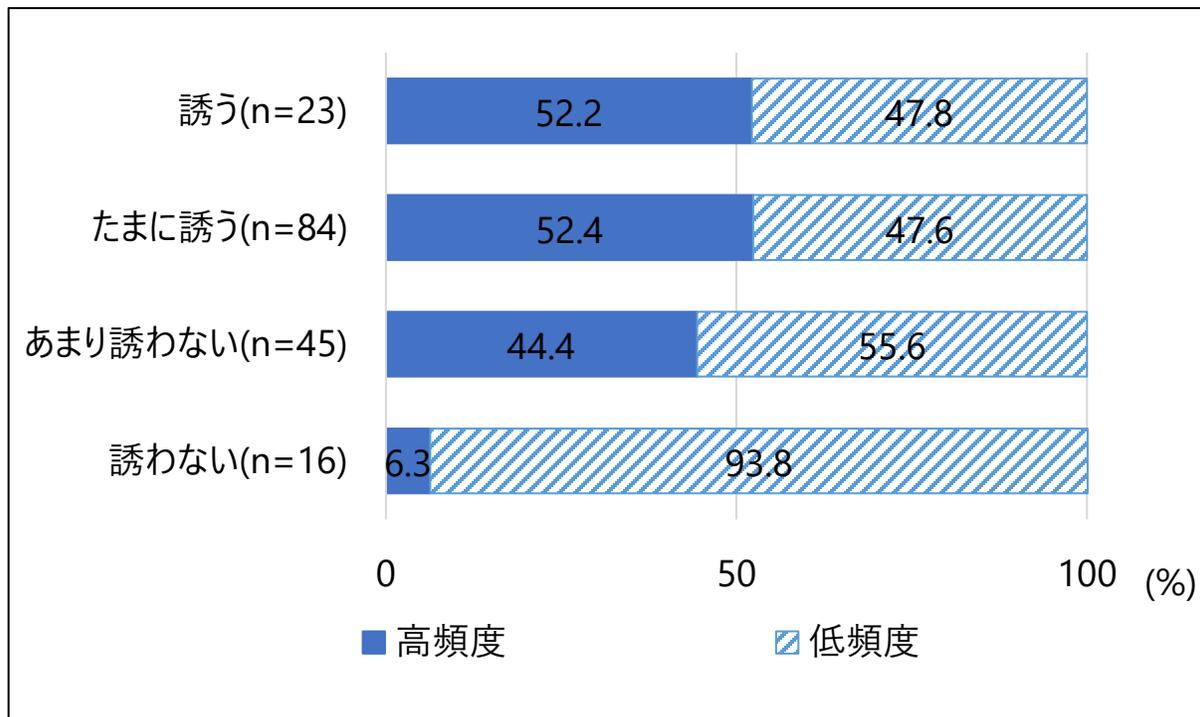


注 高頻度:1週間3回以上または1日1時間以上
低頻度:1週間に2回以下かつ1日1時間未満

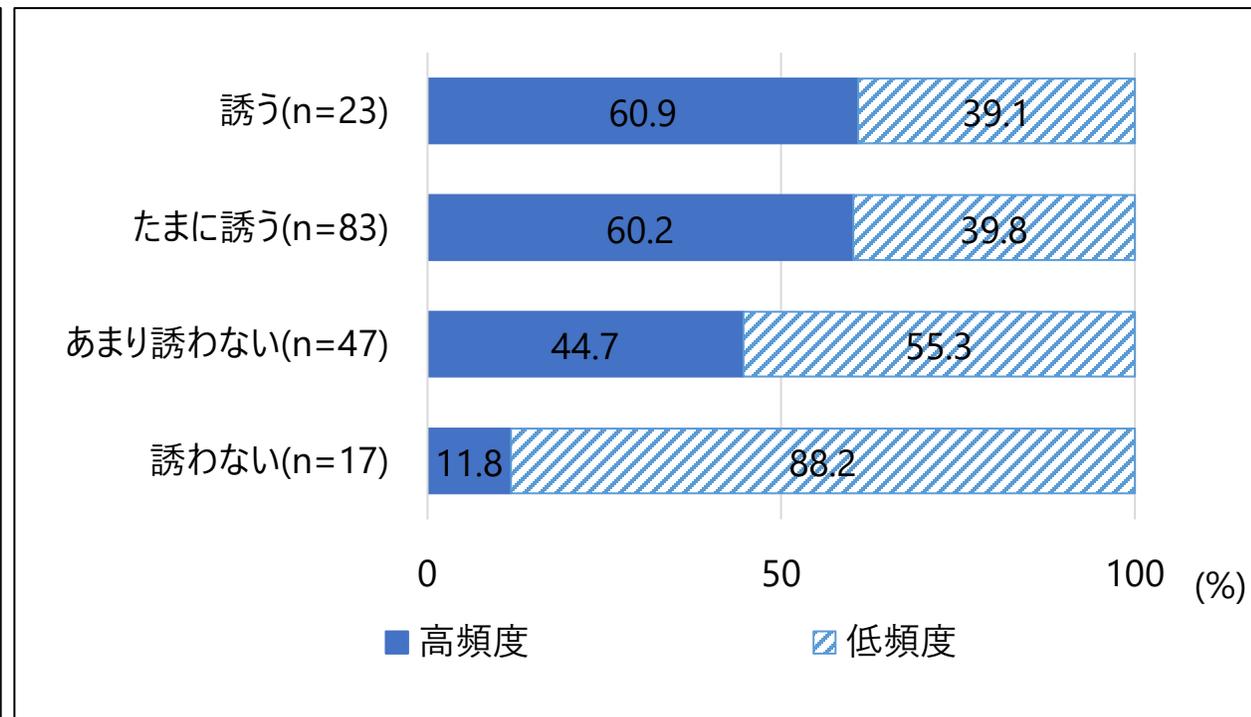
保護者が子どもを身体が動かせる施設や場所へ連れていくようにしているかを出席講座の参加前後の実施頻度別に分類した。「連れていく」の高頻度の割合は参加前76.7%、参加後72.7%であった。「たまに連れていく」の高頻度は参加前39.6%、参加後48.9%と割合が増加した。

(2) 講座参加後に子どもが保護者を運動に誘うようになったか

図表22 講座参加前の実施頻度との関係



図表23 講座参加後の実施頻度との関係



注 高頻度:1週間3回以上または1日1時間以上
低頻度:1週間に2回以下かつ1日1時間未満

運動あそび出前講座参加後に子どもが保護者を運動に誘うようになったか、講座参加前後の実施頻度ごとに図示した。参加前の実施頻度は、「誘う」の高頻度が52.2%、「たまに誘う」の高頻度が52.4%であった。いずれも高頻度が50%を超えた。参加後の実施頻度は「誘う」の高頻度が60.9%、「たまに誘う」の高頻度が60.2%と参加前の高頻度の割合よりも高い値を示した。

「誘う」ほうが「誘わない」よりも実施頻度が高く、子どもが保護者を運動に誘うことの重要性が示唆された。

(3) かくだペットボトルモデル(スポーツ)

本調査においてQ5の選択肢1、Q6の選択肢1または2を選んだ者は、運動あそび出前講座参加後に運動意欲が向上し、保護者を運動あそびに誘っている。子どもから保護者への周知によりペットボトルゴミの分別方法が定着した過去の市内の事例を参考に「かくだペットボトルモデル(スポーツ)」と定義した。

①運動への意欲

Q5 あなたは、運動あそび出前講座に参加して、運動やスポーツ・運動あそびをもっとしたいと思いましたが。

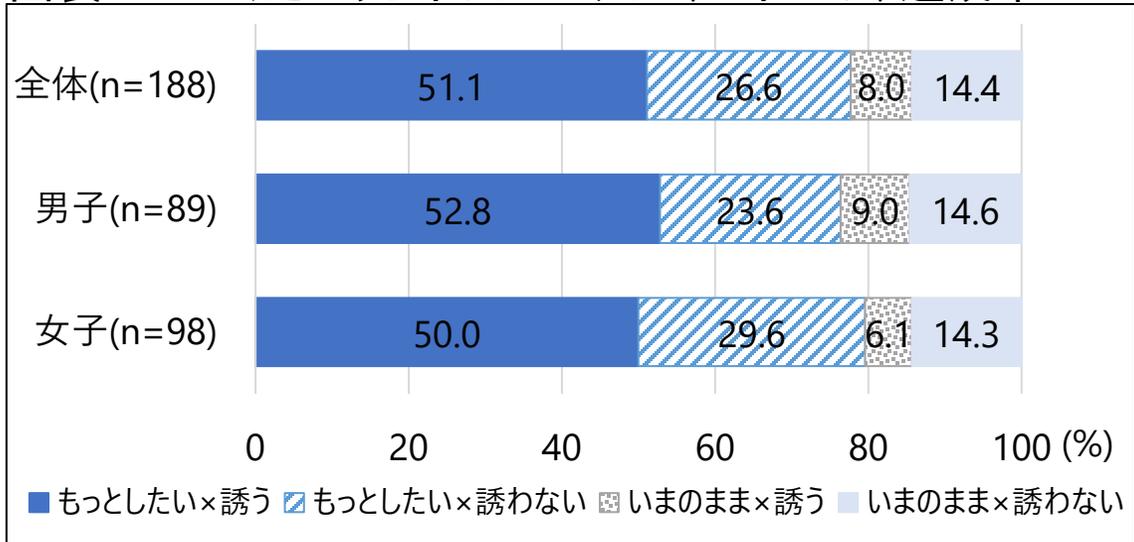
- 1 もっとしたい
- 2 いまのままでよい
- 3 いまよりもへらしたい

②保護者への声かけ

Q6 調査をお願いしたお子様が運動あそび出前講座に参加してから、あなたのことを運動や運動あそびに誘うようになりましたか。

- 1 誘う
- 2 たまに誘う
- 3 あまり誘わない
- 4 誘わない

図表24 かくだペットボトルモデル(スポーツ)達成率



図表25の「■もっとしたい×誘う」を「かくだペットボトルモデル(スポーツ)」の達成者とした。全体では51.1%、男子52.8%、女子50.0%と約半数が達成した。運動あそび出前講座の実施は、子ども自身の意欲向上に加え、家庭で保護者を巻き込んで運動あそびに取り組む行動にも影響を与えた可能性が示唆された。

VI. 主な調査結果（追跡調査）

21⇒22年追跡調査回答者※

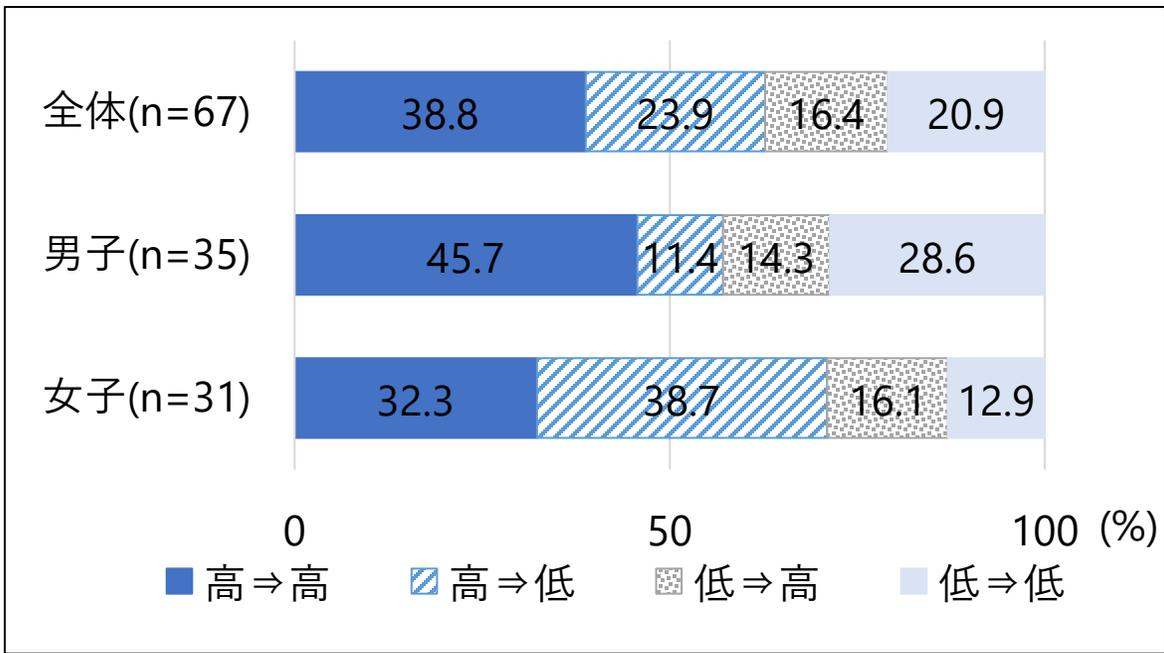
性別	度数	%
男	44	51.8
女	39	45.9
答えたくない	1	1.2
無回答	1	1.2
合計	85	100

2022年度調査では、2021年度の調査に回答した4歳児クラスの子どもが1年後にどのような変化を示したか確認するために、同一人物のデータを追跡できるような調査設計にした。表に示したように85名が分析対象となった。

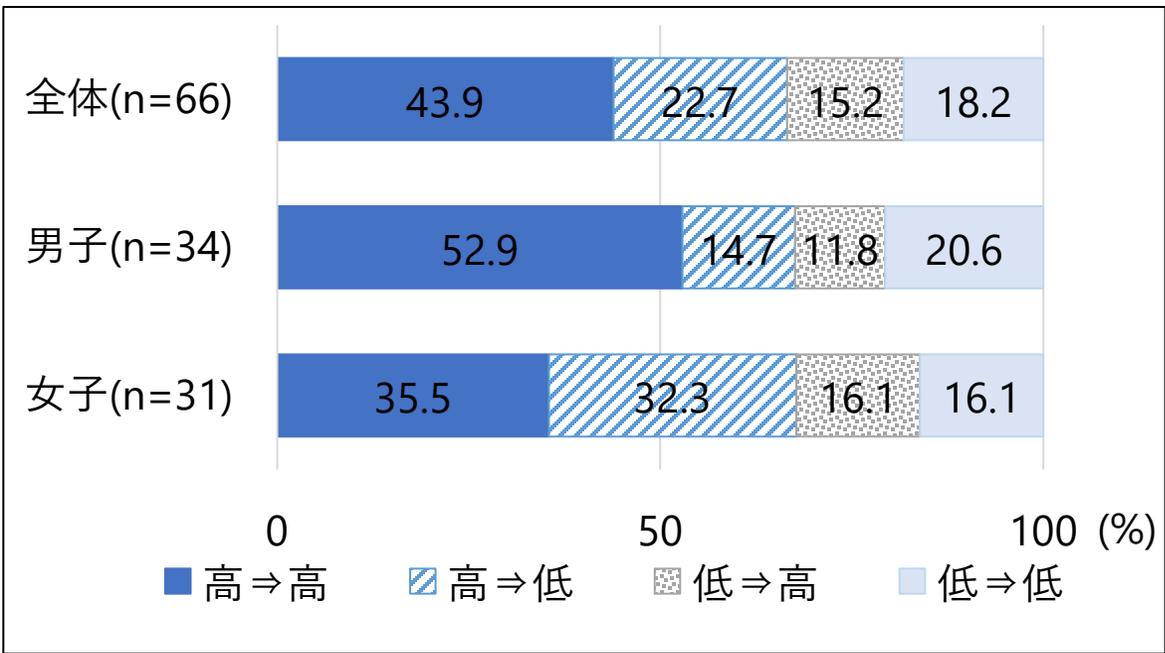
※2021年度調査、2022年度調査を2年連続で回答した人

(1) 実施頻度の推移

図表25 参加前の実施頻度推移(21⇒22)



図表26 参加後の実施頻度推移(21⇒22)

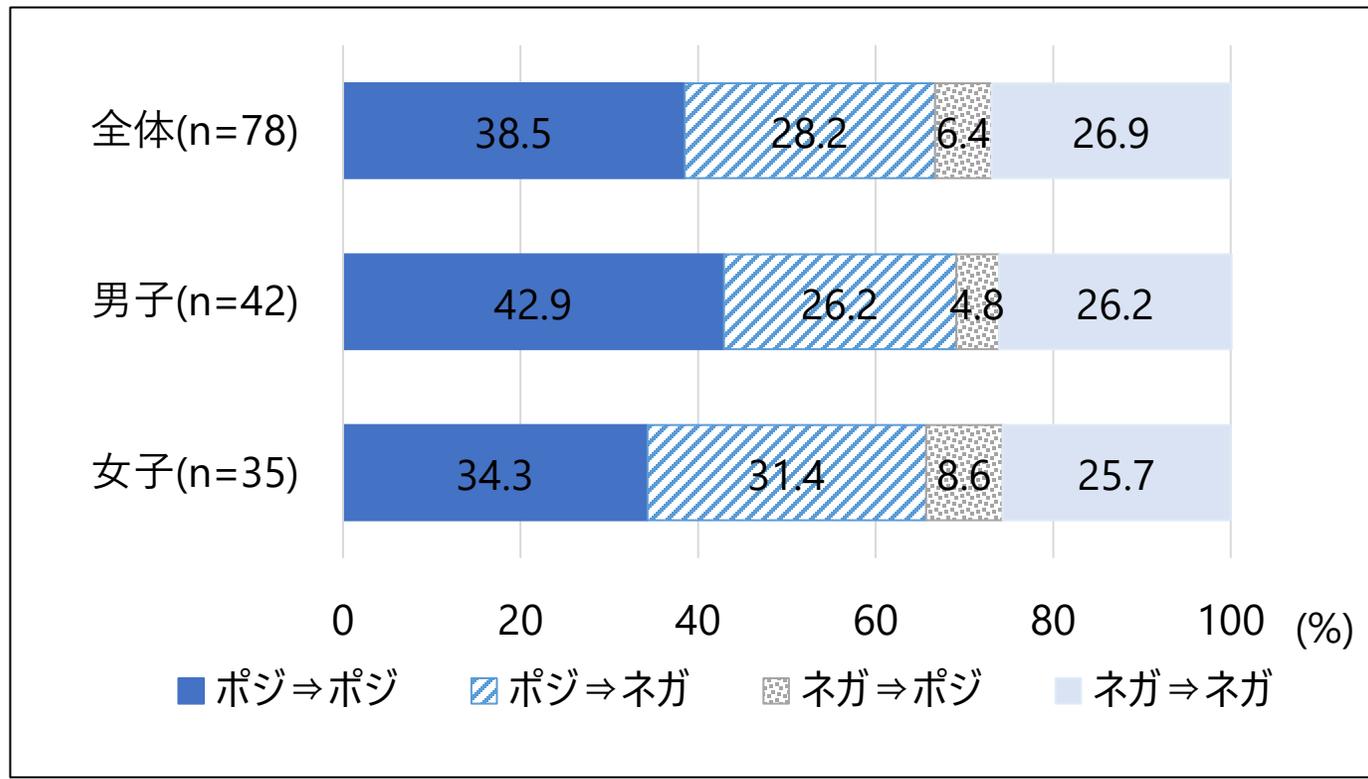


高:高頻度(1週間3回以上または1日1時間以上)
 低:低頻度(1週間に2回以下かつ1日1時間未満)

2021年度調査と2022年度調査に回答した子どもの運動あそび出前講座参加前の実施頻度の推移をみると、高頻度の維持を示す「高⇒高」は全体38.8%、男子45.7%、女子32.3%であり、参加後の「高⇒高」は全体43.9%、男子52.9%、女子35.5%であった。性別にみると、実施頻度がこの1年で下がったことを示す「高⇒低」は出前講座参加前で全体23.9%、男子11.4%、女子38.7%であった。参加後の「高⇒低」は全体22.7%、男子14.7%、女子32.3%と、出前講座参加前後どちらも男子よりも女子の割合が高い。4歳児から5歳児に上がる1年間で男女差が確認された。

(2) 運動・スポーツについて感じていることの推移

図表27 運動・スポーツについて感じていることの推移(21⇒22)



注 ポジ:ポジティブ(図表9のポジティブ項目のみを選択した園児)
 ネガ:ネガティブ(図表9のネガティブ項目を1つ以上選択した園児)

2021年調査から2022年調査にかけて、子どもの運動・スポーツについて感じていることの変化をみると、「ポジ⇒ポジ」の割合は全体35.8%、男子42.9%、女子34.3%であった。「ポジ⇒ネガ」は全体28.2%、男子26.2%、女子31.4%と性別では女子のほうが高い。実施頻度ほどの男女差はみられないものの、性別によって傾向の違いを確認できた。

■ 運動あそび出前講座の継続的な実施に向けた体制の強化

2020年度から3回の調査を行い、角田市内の4.5歳児の運動・スポーツに対するイメージや実施状況などのデータが蓄積されてきた。運動・スポーツの好き嫌い、出前講座参加後の運動意欲など運動・スポーツに対する気持ちやイメージは3調査とも良好な結果を示し、角田市内の子どもたちが前向きに運動・スポーツへ取り組む様子が確認できる。一方で、日常的に運動遊びを継続するような行動変容に至ったかという評価については課題が残る。

2021年度調査では運動・スポーツに対してポジティブな感情を持つ子どもはネガティブな子どもよりも実施頻度が高く、運動・スポーツが好きで、意欲も高い傾向が確認された。しかし、2022年度調査ではネガティブな子どもの実施頻度や意欲などの数値が改善され、運動・スポーツに対する感情による差は小さくなった。運動あそび出前講座の継続的な実施の効果があらわれたと考えられる。引き続き運動あそび出前講座を展開できるよう保育所・幼稚園との連携の強化や指導者養成などに取り組むことが重要になるだろう。

■ 家族で運動あそびを実施できる機会の増加など保護者を巻き込んだ取り組みの実施

運動あそび出前講座参加後の子どもの変化では「体を動かして遊ぶようになった」「運動が上手になった」の項目が3回の調査で増加傾向を示した。また、保護者が子どもと遊ぶ内容のレパートリーが増えるなどアクティブ・チャイルド・プログラムの実施によって期待される効果を確認できた。さらに保護者自身の運動に対する意識や行動についてもプラスの変化が確認でき出前講座の実施が子どもに限らず保護者に対しても好影響を与えている。

また、今回の調査では子どもが保護者を運動あそびに誘うか尋ね約60%は誘うと回答した。角田市ではかくた版ACPに取り組むにあたり、運動・スポーツ実施が子どもから保護者に広がることも期待しており、半数以上の子どもがそのような働きかけをしている実態を把握できた。保護者にとって運動あそびに誘われることが、身体を動かすきっかけとなりその後も継続的に取り組むことを期待したい。そのためにも子どもと一緒に参加できる運動あそびのイベント企画や施設開放などの環境の整備が必要になるだろう。

■ 保護者への啓発活動の重要性

2022年度調査では新たに保護者が子どもが身体を動かせる場所へ連れていくか尋ねた。保護者が子どもを連れていく機会が多いほうが子どもの運動・スポーツの実施頻度は高い傾向を示した。運動あそびが主目的ではなくとも、道の駅や公園に子どもを連れていきたくなるような情報発信をしながら、身体を動かしてもらえる仕組みづくり等を検討してはどうだろうか。出前講座の実施により講座に参加した子どもの保護者の運動・スポーツへの意識や行動にも少しずつ変化がみられてきたものの、3回の調査を通して大きな変化は確認できていない。今後は子どもを通して保護者に行動を促す取り組みに加え、保護者が子どもが身体を動かせる場所に連れていききっかけになるような事業の展開が重要ではないだろうか。

今後の展開

■ 小学生を含めた子どもの実態を把握するための調査設計

「かくだ版アクティブ・チャイルド・プログラム」の運動あそび出前講座の実施によって、子どもたちの運動・スポーツ習慣や生活習慣が今後どのように変化するか把握するため、昨年度調査より個人を追跡できるよう調査設計(追跡調査)を変更し、5歳児のうち約80%が分析対象となった。単年度調査の経年変化では見えてこなかった違いが確認できるなど、今後のかくだ版ACP展開に向けた示唆の獲得につながった。しかし、1年間の追跡調査だけでは得られるデータには限界があり、今後、出前講座を経験した子どもたちの小学校進学後の運動習慣や生活習慣の実態調査を行い、かくだ版ACPの取り組みが角田市の子どもたちにとってどのような効果をもたらしたのか中・長期的な視点で評価する必要があるだろう。

■ 低年齢クラスへの運動あそび導入に向けた環境整備

今年度から複数園の0～3歳児クラス担任を対象とした研修会が実施され、各園から合計30名以上が参加した。具体的な講座は来年度からスタートする。4、5歳児のように1か所に集まり研修をする講義形式ではなく、普段の保育の中でどのように運動あそびの要素を取り入れていけばよいか、引き続き仙台大学の原田健次教授に協力を仰ぎながら各クラスで実施の予定である。また、外部の補助金等を活用しながら普段の保育の中に運動あそびを取り入れやすくするための備品を行政が準備するなど、環境の整備に取り組んでいる。

■ 事業継続に向けた体制の強化とスポーツ行政への貢献

今年度からは本事業の運営主体であるスポネットかくだの構成団体である(公財)角田市地域振興公社、(NPO)スポコムかくだ、(株)フクシエンタープライズの3者が「かくだスポーツビレッジ運営共同企業体」として、総合体育館や屋内温水プールなど角田市のスポーツ施設が集まる「かくだスポーツビレッジ」の指定管理者となり、これまで生涯学習課が担っていた事務局機能の一部を受け持つなどスポネットかくだ全体の事業継続に向けて体制の強化が図られた。本事業においても運動あそび出前講座の継続に向けた指導者の確保・育成に加え、0～3歳児クラスの子どもの対象とした出前講座実施の準備が進められた。また、令和6年3月策定予定の「健康増進計画」「第2期スポーツ推進計画」に本事業を含めたスポネットかくだの取り組みが参考にされるなど、スポーツ行政において重要な役割を担いつつある。

中長期的な展望

■ 幼保小の連携による子どもの運動・スポーツ環境の充実化

角田市では小学生を対象とした事業は展開されていないものの、本事業を3年間継続する中でかくだ版アクティブ・チャイルド・プログラムに対する評価も高まり、小学校への導入が具体的に検討され始めている。さらに、運動部活動改革についても来年度から事業がスタートする予定である。2022年度は幼保小中の取り組みはそれぞれが個別の事業として展開、検討されてきたが、今後、各事業を進める中でまずはかくだ版ACPの小学校導入に向けて幼保小の連携強化と具体的な事業計画策定に着手することが求められるだろう。

2022年度かくだ版アクティブ・チャイルド・プログラム調査報告書

2023年 3月発行

発行者 公益財団法人 笹川スポーツ財団

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル 3F

TEL 03-6229-5300 FAX 03-6229-5340

E-mail info@ssf.or.jp URL <http://www.ssf.or.jp/>

無断転載、複製および転訳載を禁止します。引用の際は本書が出典であることを明記してください。
本事業は、ポートルースの交付金による日本財団の助成金を受けて実施しました。